

高論文に対するコメント

田村 和彦
TAMURA Kazuhiko

ここに訳出された論考は、北京大学社会学部社会学人類学研究所の教授である高丙中氏による「日常生活」に関する論文である。脚注にあるように、この論文は、2016年におこなわれた「京師社会学論壇・民俗学シリーズ」での講演をもとに書き改めたものであり、近年の同氏の関心を随所に反映した構成となっている。

高丙中氏のご経歴については、すでに、本雑誌第2号にて、西村真志葉氏による詳細かつ正統な紹介があるので、そちらを参考されたい[西村 2016:74-75]。

本論考の主要な内容は、タイトルにあるとおり、イギリスから民俗学というディシプリンが導入され、そのなかで編成された中国の民俗学の特徴を整理し、改革開放以降の民俗学の復活のなかで胎動しつつあった民間文化の位置づけが、2000年代以降になって外部からもたらされた世界遺産、とりわけ無形文化遺産の観念と実践によって変化した点を指摘する。そして、論考のタイトルでもある、過去の生活の断片として、現在では文化的遺留物としての中国民俗学の対象に、無形文化遺産がもたらした未来あるものとしての像を加えることで、民間の日常生活の一部が保証されるようになった今日の状況を明確にし、その作用を認めたくえで、しかしながら、無形文化遺産の運動がディシプリンに何をもちたらし得たかについては慎重な姿勢を示す。そのうえで、民俗学がその発生当初から関係を取り結んでいた日常生活の未来と、民俗学そのものの未来を関連付けて、将来を展望する構成となっている。

アウトラインという性質上、緻密な論理構成による全体像の提示というより、中国民俗学の過去を概括し、現状を位置づけ、未来を展望するという趣旨であるが、本文のいたるところに、中国民俗学をリードしてきた主要人物の一人としての高氏の関心のあり方、問題意識がちりばめられている。高氏の業績については、先述の西村氏の紹介に譲り、ここでは、以下の3点、すなわち、高氏の早い段階からの関心であり、現在の中国民俗学の新たな関心事でもある「生活世界」について、この10数年にわたって中国民俗学でのもっとも大きな運動となった無形文化遺産について、そして、高氏の所属機関である社会学人類学研究所について、をトピックとして取り出し、それらについて、いくらかの背景に触れることで、本稿理解の補助線を引いてみたい。

まず、「生活世界」であるが、高氏の博士論文であり、現在もなお中国の民俗学を学ぶ者には必読の書籍となっている『民俗文化與民俗生活』(1994年出版、なお論文としては1991年公表)のなかで、西洋哲学に根差した同概念を、同氏が民俗学のなかで展開して以降の重要なテーマである。文献を資料とし、過去を再構成する傾向の強かった中国民俗学において、現在性を強調し、そこに「生活世界」概念を組み合わせた同氏の衝撃は大きく、若いときから同氏はすでに気鋭の研究者

として高名であった。わたしは、後述する北京大学社会学人類学研究所で、1999年に初めて高氏にお会いしたが、柔和なまなごしの笑顔の絶えないご様子からは、文化遺留物研究を激しく批判し、新たな民俗学論理を構築しつつあった当該論文からの印象とはずいぶん異なった印象を受けたことを覚えている。

さて、民俗学を現在学とするために用いられた「生活世界」の概念は、しばらく時間を置いたのち、社会科学の呂微氏、戸曉輝氏らによる洗練を経て、現在の中国民俗学の重要なテーマの一つとなっていることは、すでに西村氏の指摘する通りである。この数年、「日常生活」、「生活世界」は再び脚光を浴びつつあり、高氏の博士論文の再読に関する論考や、「日常生活」と民俗学の関連を考察する論文なども現れている。また、中国民俗学の新たな方向性の一つとして、この概念をテーマとする研究フォーラムも相次いで開催され、多くの研究者、大学院生を集めている。例えば、2016年だけでも、中国人民大学社会人口学院で開かれた「日常生活研究フォーラム」(11月5～6日、なおこのフォーラムの情報及び論文集は、華東師範大学民俗学研究所でポストドクター研究員をされている中村貴氏に提供していただいた)、中山大学無形文化遺産研究センターと民俗研究センターの共催で「民俗学の“日常生活”への転向の可能性」フォーラム(11月18～20日)が開催されるなど、常に最新の研究動向をキャッチアップしてゆく傾向のある中国民俗学が、ポスト・無形文化遺産保護運動としてこれらの研究方向へと着目していることがわかる。ちなみに、後者のフォーラムでは、その開幕式で、この「日常生活」への方向転換の中国的ルーツが高氏の博士論文『民俗文化與民俗生活』にあることが、明確に言及されていた。このように、同氏が導入した概念は、20年以上の時間をかけて中国の民俗学へと深く根を下ろしつつある(高氏自身、雑談の中で「20年かけてやっとここまで来たよ」とおっしゃっていた)。この「生活世界」概念の導入は、単に学理としての概念にとどまらず、本論考からも明らかのように、高丙中氏にとって、あるべき社会と、政治、経済との関係や、国家と人々の理想的な関係の追求につながるものであり、その意味で一時期積極的に進められた「公民」に関する議論や、高氏と学生たちによって展開されている様々な「草の根」運動(著作収入や講演収入の一部を、正式に認可されていない民間学校で用いる教科書購入費などに充てる運動など)の実践とも連続するものである。その意味で、高氏のもっとも強い関心と関わっている問題群であるといえよう。

つぎに、無形文化遺産保護運動の位置づけについてであるが、この例として、本稿のなかにもいくつか具体的な事例として登場する旧正月や民間の祝祭日について取り上げてみたい。

2000年代になるまで、中国の国家的な祝祭日は、国慶節(建国の日)など国に固有な記念日を除いて、国際婦人デー、メーデー、国際児童デーなど、社会主義国に典型的な国際的な祝日を中心に配置されていた。高丙中氏が中国民俗学会秘書長(2002-2006年)、中国民俗学会副理事長(2006-2014年)を歴任された時期は、まさに、韓国の江陵端午節が世界無形文化遺産への申請に成功し、中国に大きな衝撃をもたらした時期(2005年)だった。東アジアにおいて文化の政治学が顕著となったこの時期に、民俗学に対して求められた国家的な要請とは、端午節に関する調査に始まり、各種の民間の祭日を調査検討し、国家の祝日へと昇華し、文化大国としての中国を明らかにすることだった。この時期から、高氏が無形文化遺産に関する国際雑誌の編集者や、国家の無形文化遺産保護専門家委員、ユネスコのアジア太平洋センター管理委員を歴任してゆくことは、こうした状況を反映している。ここには、中国における学問の布置、あるいは学術と政治の関係が現れているが、有力な研究者として中国における民俗学の地位向上のために、この運動に積極的に取り組む一方で、なすべき責務としての無形文化遺産の保護に関する運動をひとつの戦略的な契機と位置付けて、民俗学者たちが調査研究を通じて制度を制定し、行政と実際の間を取り結

ぶ戦術を通じて、「民間」と位置付けられた人々の地位を向上させる試みは、先述の、高氏の従来からの理想と符合する。いずれにせよ、ここに見られる、そして本文でも強調されている、無形文化遺産を一つのステップと捉える思考は、日本の民俗学では見られないものであるが、それをより良く理解するためには、相互に影響を与え合う東アジアの民俗学であっても、それぞれの国家において、学問の対象や方法、意義など基本的な事柄がそれぞれの社会に埋め込まれて特有の位置づけを得ていることに注意を払う必要がある。その意味で、それぞれの民俗学を相互に照射することは、刺激的な作業となるはずである。本稿は、そうした刺激の一端を垣間見せてくれる。

ただ、無形文化遺産のみが、従来、改造対象とされた民間の文化や生活を救い上げ、認知を与えたかどうかには、今後の検討の余地があるように思われる。個人的な見解としては、改革開放以降の民俗学者たちのなかには、むしろ「民俗」というカテゴリーを操作することで、従来は、「迷信」、「宗教」として制度的な枠組みのなかでは扱いきれなかった難しい領域を公的に位置づけ、保護する戦略があったと考えられる。すなわち、先に、価値判断を止揚する「民俗」としてラベリングをしており、認知を得て、その後、「民俗」の下位に設けた「精華」と「陋習」の枠組みで判断するという仕掛けである。例えば、本文のなかで事例として取り上げられている東岳廟は、かつて華北地区最大の道教正一派の拠点であり、民間信仰の盛んな宗教施設であった。中華人民共和国成立後、道士たちは還俗し、建物は政府機関の部門によって転用されていた。1999年に正式に对外开放されてまもなく、わたしが訪れた際には、それぞれの神の塑像に跪いて祈りをささげ、願い事を書いた札を隙間なく掛けてゆく、そうした「信仰」の様子が観察された。この「迷信」と判断されかねない場所が对外开放された根拠は、この場所が「北京民俗博物館」と名称づけられたことにある。「宗教」ではなく、もちろん「迷信」でもなく、「民俗」と名付けられたからこそ、修復と開放が可能となったわけである。その後、この施設には、中国民俗学会の額がかけられて、その公的認知は完全なものとなった。ここに、「民俗」という枠組みを用いた、1990年代から2000年代の戦略が現れている、と言える。そして、2008年には、この東岳廟は中国政府によって無形文化遺産リスト登録への申請がおこなわれた。このように、東岳廟の事例も、「民俗」概念の運用からたどると、改造されるべき民間という位置づけから、一足飛び無形文化遺産による矛盾の解消へと移行したというよりは、各時代の民俗学者(の一部)が、それぞれの背景の中で、その時期に使用可能な概念を操作しつつ、教条的な政治の論理を懐柔し、研究対象の公的認知を獲得するために格闘してきた過程として捉えることも可能ではなからうか。

三つ目に、高丙中氏の所属である北京大学社会学人類学研究所について、取り上げてみたい。中国、なかでも北京には高等研究機関としての中国社会科学院に民間文学、民俗学の研究所があり、また、中国民俗学の最大拠点であり、多くの優れた民俗学者を輩出している北京師範大学がある(高丙中氏もこの大学のご出身である)。こうしたなかにあって、北京大学社会学人類学研究所は、民俗学というディシプリンでは、決して著名な研究機関ではないかもしれない。実際、この研究所の前身は、1985年に著名な社会学者、人類学者である費孝通氏によって設立された研究所であり、1992年に社会学人類学研究所へと名称変更した。その後、2000年には北京大学社会学部との関係を深め、さらにのちには、現在の「北京大学中国社会と発展研究センター」となってゆくが、いずれせよ、名称上は民俗学専門の研究機関ではない。こうした所属の問題もある程度反映し、高氏の研究領域は、民俗学のみにとどまるものではなく、この点で伝統的な民俗学専門の(といっても、近年では人類学の名称を看板に加えた研究施設が増えたのだから)研究機関にいる研究者とは異なっている。例えば、本稿のなかでも、文化を構築主義的に捉え、モノグラフを書く意義についての議論が言及されているが、高氏は、中国では、James Clifford、George Marcusの編んだ

『Writing Culture』や、Paul Rabinowの『Reflections on Fieldwork in Morocco』の翻訳でも知られる。近年では、中国の人類学が著しく国内研究に偏っている状況を打破するために『海外民族誌』運動を展開され、学生たちをタイやフランス、イスラエルなど世界各地に送り、長期のフィールドワークの実施を指導されているほか、ご自身でもアメリカ合衆国でのフィールドワークを進めている。その意味で、主に英語圏の民俗学の文献、概念を積極的に導入することで中国民俗学のレベルアップを図るタイプの研究者とは異なる領域を開拓している、といえよう。高氏が所属することとなった1990年代後半の北京大学社会学人類学研究所は、少なくとも、研究者の教育、養成という点では、様々な学的背景の人々がそれぞれのパースペクティブから中国社会、文化の諸現象について発表、議論を行うことが日常化されており、民俗学の名称こそ冠していなかったが、民俗学的な視野からも現在の中国社会や文化を議論する雰囲気醸成されていた。この理由としては、研究所の副所長に中国民俗学の高名な研究者である周星氏が就任されていたことも大いに関係があろう。いずれにせよ、こうした研究所の在り方は、社会学、人類学、カルチュラル・スタディーズなど他分野との学術的競合のなかで、学際的に民俗学を捉えなおす高氏の展望のなかにも影響を与えていると思われる。

個人的な思い出話になるが、1999年当時、北京周辺の廟会の資料を集めていた私は、高氏のお持ちの妙峰山に関する資料をお借りしたことがあった。寒い北京の冬の日、自分の学生でもない一留学生のために、多忙の合間をぬって、わざわざ埃っぽい北京大学東門まで自転車を漕いで資料を届けてくれたあの日のことを昨日のこのように思い出す。常に中国の社会や文化についての未来を展望し、理論の構築とともに、数多くの実際の仕事をされ、かつ、このように、学生にも温かく接して下さる高丙中氏の周りには、いつも多くの優秀な学生が集まっている。制度的な問題もあり、こうして集まる学生のすべてが民俗学専攻というわけではなく、人類学や地域研究などの分野で活躍する若手研究者となっていることも少なくないが、中国社会を直接に、あるいは海外でのフィールドワークを経て内省的な「捲り返し」を経る間接的なやり方で、社会や文化についての関心を共有する、次世代を担う研究者たちとってよいだろう。

以上、本稿の鍵となるいくつかの要素のうち、「生活世界」に関する概念の導入、無形文化遺産の保護という社会的運動、そして、教育研究の場を取り上げて、本稿を理解するための補助線を引いてみたつもりである。本稿で未来への展望を示した高丙中氏は、中国という特有の文脈で、1990年代初頭に「生活世界」概念を提唱し、その後、哲学的思考を背景とするより精緻な理論を洗練させてきた社会科学の研究者たちと概念や発想のある部分を共有している。他方で、民俗学の現代性を早くから提唱し、民俗学のフィールドワークを重視し、それを実践し、教育することで、哲学的背景を持つ概念が実際の社会状況によって採まれる現場に近い場所に身を置いている。どのように、この両者を橋渡しし、中国の民俗学を発展させてゆくのか、そして、中国における「普通の人々」に具体的にどのように中国民俗学がかかわってゆくのかについて、同氏の研究と実践とは、今後も、大いに注目される。

参考文献

西村真志葉 2016 「解題『生活世界—民俗学の領域とディシプリンとしての位置付け』『日常と文化』Vol.2